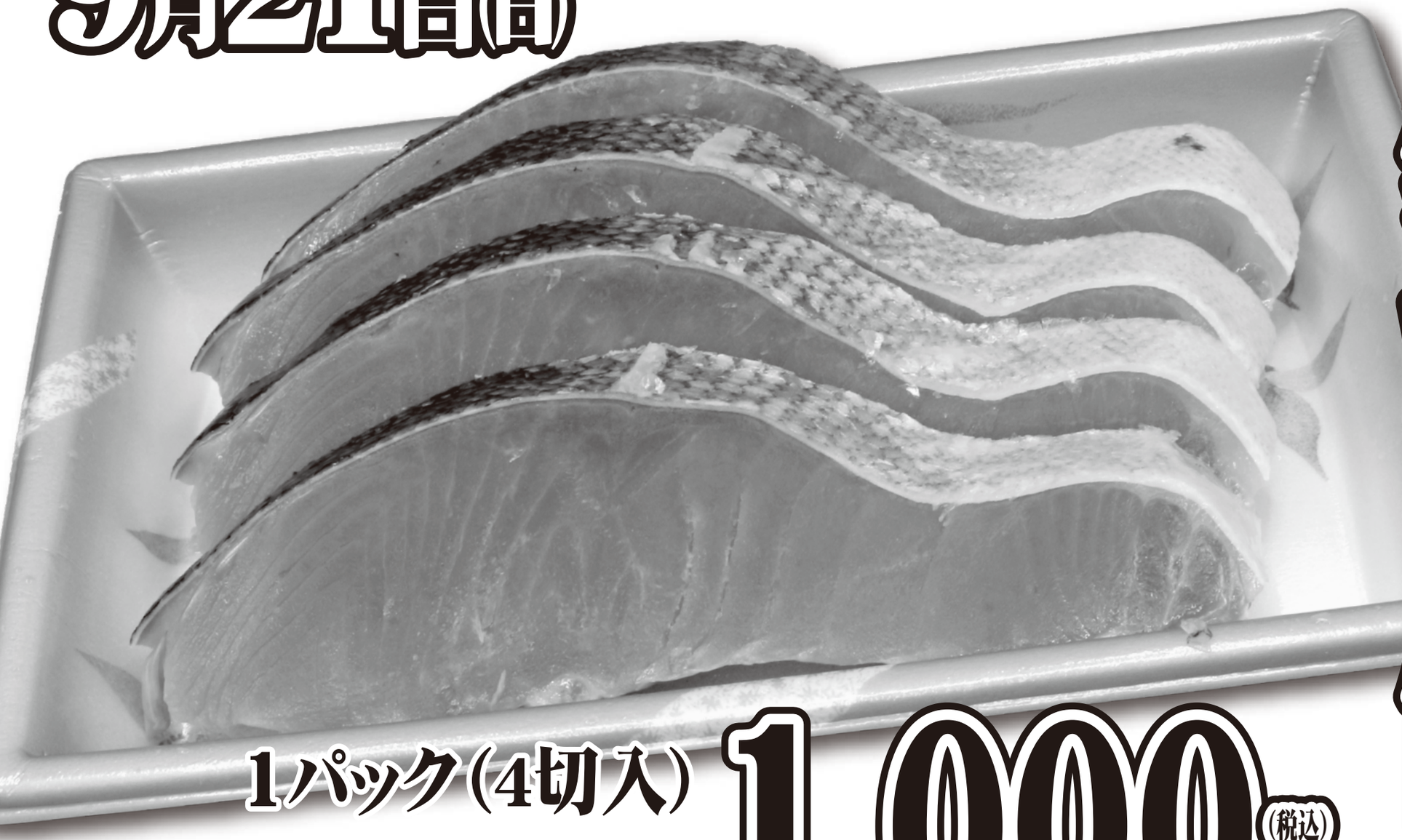
9月21日(日)



銀鮭

バター醤油風味

1パック(4切入)

1,000円(税込)

そろそろ新米が出始める季節になり新米のお供を探していたら、「数量限定じゃけど、あまり製造されていない鮭があるよ！」と市場の方から話しがあり、数量限定と言う言葉に弱い私は直ぐ仕入れてしまいまして…試食してみれば、ほのかにバター醤油の味がする!!という事で、今回ご紹介する味付け鮭はバター醤油鮭です。

爆発的人気の明太子銀鮭に続き第二弾！ご飯はもちろん、きのこと一緒にホイル焼きやシチューに入れても良いかと!!

今日は、このバター醤油風味銀鮭の他、色々な鮭を販売致します。秋の鮭色々祭りです。そのままのタイトルですみません(笑)。

新物生秋鮭や、汐紅鮭、汐麹銀鮭、西京漬け等、豊富に並べてお客様をお迎えします。是非鮭祭りお楽しみください。

さぁ～いらっしゃい!!いらっしゃい!!沢山のご来店、スタッフ一同お待ちしております。

西田鮮魚店　店長　祐宗　優司

ジョイフル 西田鮮魚店 ☎72-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489（旧庄原市内はご自宅に配達）

『男の人生ここからがむずかしい』

鮮コーポレーション㈱　代表取締役会長　西田　昌史

おはようございます。どんよりした空に秋の長雨が続いていますが、ご機嫌いかがですか？
『昔たくろう　今まさと』読みました。僕の今そのものと、いつも思いながら聞いている語り歌です。
（曲名は）『ありふれた人生』ではなく『ありふれた人生だけど』です。好きな歌なので一ファンとしてお伝えします。

先週の日曜日（9月14日）の朝8時39分、私のＬＩＮＥに入っていた。この日のチラシの裏に書いた杉本真人の歌の曲名が違っているとのご指摘だ。ドジャースを見ていた私が気づいたのは1時過ぎ。先輩からのメールだ、すぐに返さんと。

お久しぶりです。お恥ずかしい限りです。
いつからでしょうか曲の名前を覚えられなくなりました。すぎもとまさとも例外ではありません。とはいえ、人様に見ていただく場合は、しっかり確認しなければ・・・・。
でも、ホントにジ～ンとききますよね。

そう書いて返信した。
『ありふれた人生』ではなく『ありふれた人生だけど』。今、いちばんの推しの歌の曲名を間違えるなんて・・・・。
それにしても、なんだろう、曲名を覚えられないというか覚えない。覚える気がないといえばそうだが若いころは、それでも曲名はもちろん歌詞もスッと頭に入ってきたし自然と覚えていた。それが、いつのころからか「いい歌だなぁ」と思うのに曲名が出てこなくなった。覚える気がないのだから仕方ないが・・・・。年？
で、人に話すときにはこうなる。
「あれあれ、杉本真人のあれ。新宿の居酒屋を閉じるママが、お客さんの名前を出して呼びかけるように歌うあれ、ちあきなおみが歌うとるあれ」
答は『紅とんぼ』。誰しも、こんな店に通ったことがあるはずだ。『アイリー・タイム』みたいな店かな。
と、ここまで書いて、またまちがってはいけないので、『杉本真人　紅とんぼ』とネットで調べたが出てこない。出てこないわけだ。違っていた。杉本真人じゃぁなかった。吉田旺作詞、船村徹作曲だった。ずっと、杉本真人だと思っていた。あらためて『杉本真人　ちあきなおみ』で調べたら『紅い花』だった。この歌もいいのだが、どこで混じってしまったのだろう。年？
そんなこんなで曲名を覚えないどころか、なんやかや混じりこんで、違ったことを覚えていることもあるのだと気づかされた。
まぁ、そんなことより、先輩からのメールの『僕の今そのものと、いつも思いながら聞いている語り歌です』という言葉がうれしかった。私と一緒だ。
たぶん還暦を越えた頃から男は心のどこかに隙間ができる。

Ⅱ　テレビ寺子屋　熟年離婚

日曜日の朝、4時過ぎに目が覚め、寝られなくなった。枕の位置を変えたり頑張ったが目は冴えるばかり、仕方なくテレビをつけた。10時からはドジャースが始まるがそれまでが長い。チャンネルを変えながら、見るともなく見ていた。『文枝の演芸図鑑』で柳家さん喬の『刻そば』をやっていた。すごいなぁ。おなじみの演目で落ちもわかっているのに笑ってしまう。

Ⅰ　記憶違い

6時半から8チャンネルで『テレビ寺子屋』があると番組表にあった。何度か見たことがあるがけっこう為になる。今日のテーマは、なんと『熟年離婚』。先生は『行列のできる相談所』の菊地弁護士。この日のチラシの中身に沿っているかも。よし、これを見よう。
それにしても、この日曜日の早朝の時間帯の番組は私たちがターゲットなんだということがよくわかる。目覚めが早すぎるのは私だけではないのだ。

Ⅲ　「母さん長い間ありがとう」

菊地弁護士の事務所には、けっこう離婚話が持ち込まれるそうだ。夫と妻、どちらからの申し立てが多いんだろうか。今回の依頼者は女性、妻の方からの申し立てだ。
調停当日。裁判所では、調停委員を前にして妻、妻の弁護士、夫の弁護士、夫の順に並ぶ。でないと、取っ組み合いが始まったら困るからと菊地弁護士。ＤＶもあるし…。
調停の間、夫はチラチラ妻に目をやる。しかし、妻はガン無視。あらぬ方を見たり、目の前の書類に目を落としたり。顔も見たくない心の内を態度で示す。
それでも夫は意地でも離婚は認めんと強気の構え。
この期に及んで、「お前は黙って言うことを聞いていればいいんだ」状態。結婚から何年も何十年もそうしてきた夫はそう簡単には変われない。
しかし、奥さん側からのきつい指摘に、だんだんと気弱になり妻をチラ見する。そんな夫の不安そうな様子を尻目に協議は進み離婚が認められた。
妻が部屋から出て行く。そのとき、夫は妻の背中に向かって声をかけた。
「母さん、長い間ありがとう」。お互いを父さん、母さんと呼んでいたらしい。菊地弁護士はその時、思ったそうだ。
「なんで、もっと早くそう言えなかったのか」と。
別室に移った妻に弁護料の話を切り出そうとした瞬間、妻は両手をあげて「万歳」と叫んだ。

Ⅳ　濡れ落ち葉亭主

菊地弁護士はこうも言っていた。年をとると夫は妻に、だんだんとすり寄っていくようになる「俺も一緒に」と。
還暦を過ぎると男は、少しづつ仕事の一線を退く。職場での立場が弱くなる。もしくは無くなってしまう。古希ともなればなおさらだ。それまでが嘘のように世間が狭くなる。
子どもは子どもの家庭がある。そばにいてくれるのは奥さんだけ。『濡れ落ち葉亭主』の誕生だ。それならそれで、可愛げにすればいいが、三度の飯から掃除洗濯は当たり前、「ありがとう」の一言もなく・・・・。愛想をつかされても仕方ない。奥さんは奥さんで長年培ってきた世界があるのだから。

Ⅴ　男の最後のロマン

ただ、そんな男のひとりとして言わせてもらいたい。一人になると家事ができないからという理由で一緒にいたいんじゃなくて、何十年も連れ添った二人にしかわからない歴史があるから、最期まで連れ添いたいと思っているんだよと。
私の父は57才で亡くなった。父は日赤に入院して一週間で逝った。病と闘う父の気力を支えたのは母だった。
亭主関白の父だった。よく喧嘩する夫婦だった。それが晩年変わった。入院したベッドの上で、いつも以上に「おかあちゃん」と呼びかけていた。母に看取られて、父はこの世を去った。
男にとっての最後のロマンは妻に看取られることだと思う。
「熟年夫婦にとって大切なのは、二人の距離感です」
菊池弁護士の言葉だ。

２０２５年９月21日